

(別紙2)

論文審査結果の要旨

氏名 洪 宗郁

本論文は、日本植民地期（1910～1945年）から解放後における朝鮮人社会主義者の思想と行動を、「転向」をキーワードとして分析し、朝鮮における植民地近代がもつ歴史的意味について新たな研究的視座を与えようとする研究である。

従来、日本植民地期における朝鮮人知識人に対する評価については、海外における独立運動や民族解放闘争に歴史的「正統性」を認め、植民地朝鮮内で活動していた人々を、非正統的な存在だとする倫理主義的傾向が強かった。本論文は、そのような研究的予断を排除し、金明植・印貞植・朴克采・尹行重という、「転向」を表明し、あるいは「転向」とみなされている4人の朝鮮人社会主義者の軌跡に対して綿密な実証的分析を行い、彼らの「転向」という行為の中に、歴史的主体形成の営みが存在することを論じている。植民地朝鮮における「近代」あるいは「近代化」を、解放後に視点をおいて見たとき、植民地の解体による総崩壊ともいわれる「断絶」と、解放後の社会建設・国家建設に植民地的「近代」という経験が基盤の一つを提供したという意味での「連続」という両方向から見ることができると、本論文は新たな研究的視点を提示している。

本論文は、朝鮮における「転向」を、日本と同様に政治的社会的圧力によって社会主義思想を放棄することととらえつつ、それが、日中戦争の開始という国際環境の変化と、民族問題の存在という2点において、日本における「転向」とは異なった概念でとらえるべき性格をもっていると規定するところから出発する。初期社会主義者の金明植がその独自性を主張し、主体として措定した朝鮮が、日中戦争期に帝国へと包摂されるが、そこに植民地朝鮮における思想的営為の可能性と限界が見いだされると指摘する。明確に「転向」を宣言した印貞植の、農業経済学者としての言動を分析することで、「現実」への対処という意味で、「転向」前後における思想的連続性の存在が論証される。植民地期から解放後まで連続して活動をしたマルクス主義経済学者である朴克采と尹行重の2人は、「転向」にも関わらず、解放後において経済学者として高い評価を受けたが、その背景に社会主義的民族経済と戦時統制経済との親和性あるいは連続性があったことを論ずる。こうして「転向」者たちは、反資本主義・脱植民地という主体形成への意思をもちながら、むしろそれ故に、日本による戦時統制を遅れた朝鮮における社会改革だと判断し、東亜新秩序や協和的内鮮一体論に対する支持につながったと説かれ、朝鮮における「転向」のメカニズムが明らかにされる。

本論文については、4人を「転向」者あるいは植民地期朝鮮人社会主義者の代表として選定することの妥当性について若干の疑問が提出された。しかし、それは本論文の価値を傷つけるものではない。むしろ、日本近代史や中国近代史などにまで研究の参照軸を与える優れた実証研究であるとの評価で見解の一致をみた。

よって審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判定する。